

「文人サークルへようこそ」展によせて

柳沢淇園、中西家、鶴亭をめぐる交流

「文人サークルへようこそ」展に出陳される「指墨竹図」(個人蔵・図1)は、柳沢淇園の指墨の優品です。柳沢淇園は、柳沢吉保の筆頭家老である柳沢(曾禰)保格の次男として元禄16年(1703)に江戸に生まれました。幼い頃より聡明であったといい、吉保のもとに集った学者や黄檗僧などと交流しながら成長しました。享保9年(1724)、主家の転封に伴い大和郡山に移り住みます。「不行跡」のために処分を受けるといふ挫折も経験しますが、享保15年(1730)に家督を継ぎ、40代頃から宝暦8年(1758)に56歳で没するまで重要な藩政に携わりました。「淇園」は号であり、名は主君の大和郡山藩主・柳沢吉里(吉保の子)より一字を賜り、「里恭」といいました。柳沢里恭を中国風に縮めた「柳里恭」の呼称でも知られています。

淇園は郡山藩士として活躍する一方で、書や漢詩、俳諧などにも優れた文雅の人でした。特に淇園が関心を寄せたのが、中国の絵画「唐絵」です。長崎の絵師や、中国の最先端の文化を伝える黄檗僧より知識を得て、濃彩の人物図や花果図、水墨の竹図などを得意としました。筆ではなく指に墨をつけて描く「指墨」も、淇園の得意とした絵画でした。中国では唐時代に水墨画が成熟しますが、規格を打ち破ろうと、手や足、頭髮などに墨をつけて大胆奔放に絵を描く人々も現れるようになります。宋時代以降は下火となりましたが、清時代前期に活躍した高其佩がこの指墨の技法を極め、再び注目を集めるようになります。この古くて新しい手法は、黄檗僧などを通じて日本にもたらされたと考えられます。淇園は日本において早くより指墨に

親しんだ人物の一人でした。

淇園筆「指墨竹図」(図1)に描かれる竹の葉(図2)は、描きはじめの上部が丸くなっています。墨をつけた指の腹をぐっと押しつけ、そこから少し力を抜きつつ葉先まで墨を伸ばしていることが窺えます。筆に比べると指は多くの墨を含むことができず、葉先に擦れが多くなっており、それがまた味わいとなっています。細い線で濃く表された竹の節は爪を使って描いているのでしょうか。やや淡めの墨と濃いめの墨と、大きく分けて二段階の濃度の墨が用いられており、竹の葉の前後関係をすっきりと示しています。竹を左に寄せ、署名・印章も左にいれ、右側の空間を広くとっています。署名は「淇園」、印章は朱文方印「淇園」と白文方印「柳里恭字公美」の二印が捺されています。署名・印章の傍らには「指墨於中茂賢之欄川之亭」と記されています。中茂賢という人物の欄川之亭と呼ばれる邸(もしくは一室)で淇園がこの作品を描いたことが分かります。

中茂賢とは、河内国喜里川村(現在の東大阪市の枚岡あたり)で庄屋を代々務めた中西家の十代目・茂賢の

ことです。中西茂賢(宗兵衛)に宛てた淇園の書簡が何通か残されており、淇園は藩務で大和郡山と大坂を往復する途中に、中西家をしばしば訪れていたようです。中西家の当主たちは俳諧や漢詩、絵画、書など、幅広い学芸に親しんでおり、喜里川村の文化の中心的存在で、中西家には淇園をはじめ、多くの文人たちが集っていました。指墨は制作過程が面白いので、雅会でのパフォーマンスとして楽しまれていたと考えられます。中西家の邸で茂賢らが見守る中で、淇園は指に墨をつけてこの竹を描きあげ、喝采をあげたのでしょう。

黄檗僧で絵を得意とした鶴亭(享保7年[1722]～天明5年[1785])も中西家を軸とする文人サークルの主要人物でした。大阪府立中之島図書館の中西文庫は、中西家より寄贈された中西家伝来の資料群です。中西家当主は俳諧を得意とする者が多く、中西文庫には、様々な俳人たちが記した俳諧短冊が伝わっています。鶴亭の俳諧短冊も複数含まれており、俳諧を通じて鶴亭と中西家の間に交流があったことが窺えます。また、茂賢(宗兵衛)宛ての書簡も伝わっており、その中に茂賢より頼まれた水墨画について記しているものがあることから、鶴亭は茂賢のために絵画を制作することが度々あったことが窺えます。今回初公開となる個人蔵の鶴亭筆「墨竹・墨蘭図」、「雁来紅に小禽図」

(展観のお知らせ頁参照)、「芋莖図」は、淇園筆「指墨竹図」(図1)とともに中西家に伝わったと考えられる作品です。瑞々しい筆致の墨竹図や墨蘭図、淡彩の花鳥図が中西家のために制作されていたことが窺え、興味深いです。

淇園と鶴亭は中西家を軸とする文人サークルの主要人物ですが、先述したように、いずれも黄檗文化と関係が深く、京坂の黄檗文化を軸とする文人サークルの主要人物でもあります。淇園と鶴亭の間にも親交があり、鶴亭筆「墨竹図」(個人蔵、図3)には淇園が賛を記しています。この作品の表具の背面には、淇園や鶴亭に絵を学んだ大坂の文人で、様々な文化交流の要となった木村兼葭堂の印が捺されており、兼葭堂の所蔵であったことが知られます。本展では、このように豊かに重なりつつ展開した日本の文人たちの交流の輪と、交流から生まれた作品に注目します。

(宮崎もも)



図1 指墨竹図 柳沢淇園筆 個人蔵

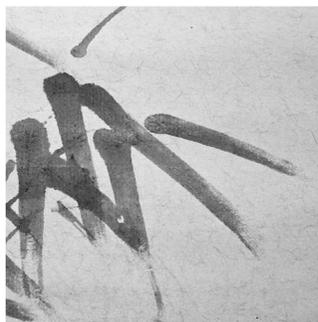


図2 図1部分



図3 墨竹図 鶴亭筆 個人蔵

季刊 美のたより No.223

令和5年6月30日

発行 大和文華館